

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 兎と鱷説話の傳播(上)   |
| Sub Title        | On story of Rabbit and Crocodile (I)  |
| Author           | 西岡, 秀雄(Nishioka, Hideo)   |
| Publisher        | 三田史学会   |
| Publication year | 1956  |
| Jtitle           | 史学 Vol.29, No.2 (1956. 8) ,p.18(130)- 37(149)   |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            |   |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19560800-0018">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19560800-0018</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 兎と鰐説話の傳播(上)

西 岡 秀 雄

- 一、はし が き
- 二、日本の「兎と鰐」説話
- 三、「兎と鰐」説話の起源論
- 四、安南の「兎と鰐」説話
- 五、カンボジアの「兎と鰐」説話(以上本號)
- 六、マライの「兎と鰐」説話
- 七、その他の「兎と鰐」説話
- 八、結 論

### (一) はし が き

この研究は、主として太平洋戦争の眞最中、私が陸軍航空隊に召集されて、南方特に佛印・カンボジア・タイ・マライ半島方面に暮していた際に、軍務の余暇を利用して調査したものである。その要旨は、すでに一九四三年(昭和十八年)十一月一五日、サイゴン放送局より内地向けに放送し、日本でも松本信廣教授が早速と當時慶應義塾大學にあつた亞細亞研究所の機關誌「亞細亞研究」(第三〇卷第一〇號)誌<sup>上</sup>の東亞彙報欄に、『因幡の白兎傳説の南海傳播』と題して紹介の勞をとつて下さつたことがある。また内地で受信した當時のサイゴンからの放送録音盤<sup>レコード</sup>も幸いに残つており、私の當時集収した文献も亦焼失を免れたので、茲に戦後の若干の所見をも加へて、資料や研究を纏めて置く次第である。

- 1 「因幡の白兔」傳説の南海傳播（「亞細亞研究」第三〇卷 第一〇號）昭和十八年十二月
- 2 音響科學研究所音盤 B0598~B0603

## (11) 日本の「兔と鰐」説話

因幡の白兔が鰐を騙した話は、「古事記」上卷に大國主神の神話に結合して

僕在淤岐嶋、雖欲度此地、無度因故、欺海和邇言、吾與汝、競欲計族之多小、故汝者、隨其族在悉率來、自此嶋至干氣多前、皆列伏度、爾吾蹈其上走乍讀度、於是知與吾族孰多、如此言者、見欺而、列伏之時、吾蹈其上讀度來、今將下地時、吾云汝者我見欺言竟、郎伏最端和邇、捕我、悉剝我衣服、因此泣患者、

とあるのが、わが國では初見であり、この話は後世に色々と語り傳へられて余りにも有名である。例へば室町時代「塵袋」や「塵添盛囊鈔」に引かれた「因幡風土記」には

カノ國ニ高草郡アリ：コノ所モト竹林アリケリ、其故カク云ヘリ：昔コノ中ニ老タル兔スミケリ、或時俄ニ洪水出來テ、其ノ竹ノ林水ニ成ヌ、浪洗テ竹根ヲ掘ケレバ、皆崩レ損ジケルニ、兔竹根ニノリテ流レケルホドニ、オキノ島ニツキヌ、水カサ落チテ後本所ニ歸ラムト思ヘドモ、渡ルベキカナシ、其ノ時水中ニ鰐ト云フ魚アリケリ、此兔鰐ニ云ヤウハ、汝ガ族ハ何程カ多キ、鰐云ヤウハ、一類多クシテ海ニ充チミテリト云、兔云ク我族ハ多クシテ山野ニ滿リ、先ツ汝ガ類ノ多少ヲカズヘム、ムロノ島ヨリ氣多崎ト云所マデ鰐ヲ集メヨ、一々ニ鰐ノ數ヲカズヘテ類ノ多キコトヲ知ム、鰐兔ニタバカラレテ親族ヲ集メテセナカヲナラベタリ、其トキ兔鰐共ノ上ヲ踏デ數ヲカズヘツツ、

竹崎へ渡ツキヌ、其後今ハシスツト思テ、鰐ドモニ云ヤウハ、我汝ヲタバカリテ、爰ニワタリツキヌ、實ニハ親族ノ多キヲ見ニハアラズトアザケルニ、右ノ鰐ドモ腹立テ、兎ヲトラヘテ兎ノ毛ヲハギトリテ、毛モナキ兎ニナシタリケリ、ソレヲ大已貴神哀ミ玉ヒテ教ヘ玉フヤウハ、ガマノ花ヲコキチラシテ、其上ニ伏テマロベトノタマウ、教ヘノママニスルトキ、多クノ毛モトノゴトクイデキニケリト云ヘリ、

と傳へられている。これが文部省發行の小學校の國語教科書である「よみかた」四（昭和十六年）には「白兎」と題して白兎が、島から向かふの陸へ行つてみたいと思ひました。ある日、はまべへ出て見ると、わにざめがゐりましたので、これはよいと思つて、「君の仲間とぼくの仲間と、どつちが多いか、くらべてみようではないか。」といひました。わにざめは、「それはおもしろからう。」といつて、すぐに仲間を大勢つれて來ました。白兎はそれを見て、君の仲間はずいぶん多いな。ぼくらの方が負けるかもしれない。ぼくが、君らのせなかの上を、かぞへながらとんで行くから、向かふの陸まで並んでみたまへ。」といひました。わにざめは、白兎のいふとほりに並びました。白兎は、「一つ、二つ、三つ、四つ。」とかぞへながら、渡つて行きました。もう一足で陸へあがらうといふ時、白兎は、「君らはうまくだまされたな。ぼくはここへ渡つて來たかつたのだ。あははは。」といつて、笑ひました。わにざめはそれを聞くと、たいそうおこりました。一番しまひにゐたわにざめが、白兎をつかまへて、からだの毛をみんなむしり取つてしまひました。

云々と述べられている。ところが巷間の兒童繪本、例へば大日本雄辯會講談社發行の大木雄二氏の「いなばの白兎」（昭和廿八年）には、

むかしむかしのおおむかし、隠岐のしま（島根縣）に一びきのしろうさぎがすんでいました。ひとりぼつちでさびしくてたまりません。ともだちがほしいとおもいました。まいにちうみべへいつてむこうにみえる因幡のくに（鳥取縣）をながめながら、うみをわたるくふうはないかとかんがえていました。うさぎがいつものようにうみをながめていると、ごぼごぼとおとがして、わにざめがうみからかおをつきだしました。うさぎはわにざめにむかつていきました。「きみらのなかまと、ぼくらのなかまとどちらがおおいか、かずをくらべようではないか。」「よし、くらべよう」とこたえて、わにざめはうみへもぐつていきましたが、まもなくおおぜいのなかまをつれてもどつてきました。そのかずのおおいこと。うさぎはびつくりしました。わには一れつにならびました。隠岐のしまから因幡のくにまで、ながいながいわにざめのはしができました。「さあ、かぞえるよ。」うさぎはわにざめのせなかにびよんととびのりました。ひいふうみいとかぞえながら、びよいびよいはねていきました。もうすこしで因幡のくにへつくところで、うさぎはおおきなこえでわらいました。「はははは、わにざめのおばかさん。」うさぎはつづけていきました。「きみらのなかまと、ぼくらのなかまとかずをくらべるといつたのはうそだつたのさ。ぼくはこうして因幡のくにへきたかつただけさ。」これをきいてわにざめたちはおこりました。おおぜいでよつてたかつてうさぎのけをむしりとり、あかはだかにしてしまいました。

となつている。

以上、古事記・因幡風土記・文部省教科書・講談社繪本の四つの例を比較すると、兎がワニまたはワニザメをだまし海を渡り、最後に兎が毛をむしられる點はいづれも共通しているが、目的とか兎がだました相手は、かならずしも一致

していない。古事記や文部省教科書では、なんの目的で兎が淤岐嶋から因幡國へ渡りたいのか書いていないので、講談社繪本に大木雄二氏は、一匹の兎がひとりぼっちで淋しいからと付け加えた。しかし因幡風土記では、兎が洪水でオキノ島に流されたので元の所に歸らうとしたことになっている。しかもここでこれから論じたいのは、兎のだました相手の動物についてであり、古事記では、海和邇（海のワニ）とあつたのが、因幡風土記では水中の鰐という魚と變り、近年の教科書や繪本は「わにざめ」として終つたことに關してである。

(三) 「兎と鰐」説話の起源論

古事記に記載された「和邇」を如何に解釋するかによつて、この「兎と鰐」説話の起源に對する考え方が異なつてくるので、この問題は重要である。いまこの説話の「ワニ」に關する從來の所説を大きく分類すると、次の六通りになる。

- |                  |  |   |                           |                                |
|------------------|--|---|---------------------------|--------------------------------|
| 國內起源説            |  | 1 | ワニザメ説                     | 日本には鰐は棲息しないから日本にいる他の動物とする説     |
|                  |  | 2 | ウミヘビ説                     |                                |
|                  |  | 3 | 國內ワニ説…日本に昔は鰐がいたかも知れないとする説 |                                |
| 國外起源説<br>(南方發生説) |  | 4 | 舟説                        | 日本には今も昔も鰐はおらず、和邇を南方に關係あるものとする説 |
|                  |  | 5 | 南洋民族説                     |                                |
|                  |  | 6 | 南洋ワニ説                     |                                |

(1) ワニザメ説

兎がだました動物を、古く因幡風土記が水中の鰐といふ魚と記し、現今の繪本や文部省の教科書が、この魚をワニザメとしワニザメ説を採用していることは、すでに述べた通りであるが、この説を最初に述べたのは、筆者の知る限りでは江戸中期の考証家狩谷掖齋の「倭名類聚抄箋注」のごとくで、

按鰐魚皇國不産、和邇鮫魚之一種、大頭巨口、大者吞人、

と述べている。しかしワニザメ説を最も一般的に流布してしまつたのは、白鳥庫吉博士や喜田貞吉博士などの碩學であつたようである。すなわち白鳥博士は「その古傳説に見えたるワニに就いて」(史學雜誌 第二六篇第八號 大正四年)なる論考を草して、サメという語が劍のような鋭い齒を持つた鰐の尊稱であると説かれている。すなわち劍持ちということを古語で佐比持といふ、この劍つまり佐比が佐美そして鮫に轉化したというのである。たしかに古事記に「其一尋和邇者於今謂佐比持神也」とあるし、太刀の一種を琉球の方言で「サイ」という。しかしこれはサメという魚そのものも、鋭い齒を持つていて人にも噛みつくぐらいであるから、サメ自體の語源としては正しい説明としても、これが常に鰐に對する尊稱とは限らず、鰐でも鮫でも劍持ち、すなわち佐比持ちといわれてさしつかえないのである。劍のような角を鼻先きにもつたりノセラスをサイ(犀)というのも、これに關係があるかも知れない。しかし古事記に和邇を佐比持神というにあつても、これは鰐が劍のような齒を持つているからではなく、古事記にあるごとく一尋鰐が火遠理命を奉送したときに紐小刀を賜つたことによつていのである。これは日本書紀に神武天皇の御兄皇子稻飯命が、海難に憤慨して劍を抜いて入水し鋤持神となられたこと同様に、刀または劍を持つという意味で、筆者は鰐の齒そのものを指したと

は必ずしも考えなくて良いように思われる。

喜田博士は「日鮮兩國同源論」の中で

鰐魚の説の如きは、之を以て熱帯に棲息するクロコダイルなりと解するの誤なるは云うまでもない事で、邦語のワ

ニは鮫の類の大魚を呼んだものである。(中略)是れ蓋し、古への學者が、漢字の「鰐」(鱷)の文字を以て邦語の

ワニに當てた誤解から起つたもので、神話にワニの事が繰返されてもそれは何等南方と縁あるべきものではない。

と、強く南方説を否定されているが、頭から古への學者が邦語のワニに誤つて漢字の鰐を當てたとなすのは、何の證據

もない獨斷に過ぎはしないのか。しかし、當時學界の論客白鳥、喜田兩博士の強い論調に押されて、古事記に關する註

釋本の多くは、ワニザメ説を採用し、例へば物集高量「古事記」日本文學叢書(大正七年)には

鰐の字を當つれども支那及西洋にて云う所の鰐(クロコダイル)とは同字異物にして鮫の類を「ワニ」と云ひしなり。

今も山陰地方にて鮫の事をわにと云える也。

と書いているし、次田 潤の「古事記新講」(大正一三年)には

ワニは熱帯地方の淡水に棲む鰐ではなく、今も北陸山陰地方に多く捕われるワニザメ(其の地方ではワニと呼ぶ)

の事で、鮫の一種を指したものである。

と述べ、笠原節二「古事記新註」(昭和四年)でも

鱸の族でワニザメという。

と記している。松岡靜雄「日本古語大辭典」(昭和四年)でも



或種の海棲動物を意味し、出雲傳説にも屢々あらはれるが、就中同國風土記には各地の産物として之をあげて居るのみならず、同書編纂の時から約六十年前に語部の猪麻呂の娘が之に喰はれたとある。此は今もワニサメと呼ばれる鱧の一種で、名の原義は明にせぬが、鰐魚ではない。恐らく悪魚なるが故に此名を鰐としたものであらう。と説いている。かくしてワニザメ説は文部省の教科書を初め多くの繪本に採用されて現在に到つてゐるのである。

### (2) ウミヘビ説

しかし津田左右吉博士のみは、「古事記及日本書紀の新研究」(大正八年)の中で、出雲風土記が海産物を擧げた個所にワニとサメとを別々に書いてある點からワニはサメではないとし、しかもワニに關して日本書記に「匍匐透地」という語がある點からして、ワニは海蛇であると書かれたが、このウミヘビ説にはその後賛成追隨する者はなかつたようである。

### (3) 國內ワニ説

堀内文吉氏はその著「日本及汎太平洋民族の研究」(昭和二年)の中で

古代に於いて、日本近海に南方の鰐と同種の鰐が棲息して居つたとまでは斷言し得ないまでも、次の實例に徴する時は、少なくとも南洋から日本近海へ、潮流の爲めに漂流して來た鰐が少しは沿岸や河口等に居つたと言ひ得ぬことはあるまい。大正十三年三月五日の大阪朝日紙上に『大鰐が地曳網に』と題し『富山縣下新川郡生地沖合で長さ三間、目方七十貫の大鰐が網にかゝり、見物のため附近は大賑ひを呈してゐる』と富山電話で報ぜられて居つた。日本の學者中でも北方論者は此の鰐をサメ、或はワニザメであらうと疑ふ人があるかも知れぬが、此の大鰐こそは

南洋の原産動物であるに相違ないのである。動植物の分布と潮流との關係を是認するなれば、獨り原始人の移住に對してのみこれを認めぬ理には行くまい。

と述べられている。氣候や潮流は過古においても將來においても、常に現在と同じではなく、現在より溫暖な時期もあったので、そのような時期に南方のクロコダイルが、日本近海の暖流に接する海岸地方に漂着散見しても不合理ではないが、實際に昔の鰐の骨を發掘したような實例は未だなく、古典の和邇が國內にいたクロコダイルであつたという實證は得られていない。したがつて右の堀内氏も前記のごとく述べたものの、結局は

古代日本の國土に鰐が居つたからとて『兎と鰐』の神話が日本で生れたと云う理には行かぬ。しかし乍ら鰐が日本に漂流して來たと同じ理由の下に、『兎と鰐』の神話を持つた南方の種族が日本に漂着したと解釋し得られると云ふ可きであらう。

といつて、氏自身は本説話の南方渡來を論じ、國內發生説に荷擔しているわけではないのである。

#### (4) 舟 説

松岡靜雄氏が、「日本古語辭典」においてワニザメ説を記していることは既に述べたが、氏は同時に、和邇の原義に關して同じ「日本古語辭典」の中で

ミクロシア語のワ(舟)、フィジー語のワニカ(舟)等と語原を同うするのであらう。高千穂傳説にワニに乗つて海上を來往したことが見える〔記・紀〕。此語は夙に廢用になつたが、上代はフネ(舟)と同義語として用ひられたのであらう。記紀編纂の頃には既に語義が不明になつて居たので、或る種の海棲動物でもあるかのように記述せ

られた場合があるが、此を舟として見れば古傳説は明瞭になるのである。

と説いて、ワニが本來は南方の土語に由來する舟の義と見做されている。

### (5) 南洋民族説

しかし、これより先き中山太郎氏は「日本民俗志」(大正一四年)の中で「本邦トイテムズムの考察」と題して、島根縣美保關における事代主命の手を咬んだという鰐を問題にせず鶏を忌む習俗註一や、佐賀縣神集島カンの鰐浦浦に關する傳説註二などから、南方より鰐をトイテムとした民族が日本に渡來していたと論及し、古典のワニは鰐をトイテムとする部族を意味するものとした。

【註一】 島根縣美保關の美保神社の祭神事代主命が、八上媛の許に通はれた折に時間の經つのを忘れていた所、鶏が突然鳴いて命は急いで歸途についたが、舟の擢を失い、手で漕いだため、命はその手を鰐に咬まれて終つた。それ以來この美保關の人々は命を急がした鶏を飼つたりその卵を食べることを禁じられているという。(出雲懷橋談) すなわち直接の加害者たる鰐を禁忌せず間接的な鶏を嫌つた點が面白いのである。

【註二】 佐賀縣東松浦郡湊町の沖合の神集島にある鰐浦の傳説によれば、昔この濱に鰐が男と化して濱の女と同棲していたが遂に知れて殺されてしまい、その屍體を埋めた鰐塚があるのでその附近を鰐浦と呼ぶようになったという。(唐津名所案内)  
〔註一、註二いづれも中山太郎「日本民俗誌」による〕

かくして中村徳五郎氏「日本神代史」(昭和八年)では、

鰐魚は南洋熱帯地方の産で、我が日本には神代といへども鰐魚の棲息する筈がないといふので、それは鰐鮫といつて鮫の一種であり。又は鱧の類であらうと言はれてゐる。併しそれは鰐魚そのものを直接に指したのでなく、南洋

方面から渡來したる人種に比喻したものであるまいか。兎は山の族であり、鰐は海の族であるから、常に鰐を船の代りに用ひてゐるのも面白いのである。

と述べ、鰐は海の部族、兎は山の部族を擬するものとした。そして更にこうした説は、白柳秀湖氏「民族日本歴史」建國編（昭和一七年）に「鰐を以て本國の象徴とする大わだつみ」族と題し、

海神國が今のアンナン・タイ・ビルマ地方であつたことを断定させる今一つの證據は、火遠理命と豊玉姫との御結婚に關する神話に、鰐に關する記述が一再ならず現はれて來て居ることである。（中略）水師を諸鰐と呼んで居た海神は決して北方の寒帶若しくは亞寒帶から來た民種ではない。それは必ず南方の熱帶、若しくは惡熱帶から來て居た民種である。

云々と縷々述べしめるまでに、その當否は別として南洋民族説は發展した。

(6) 南洋ワニ説

以上の(1)から(5)までの説に對して、最も素直に古典の和邇をその儘南洋の鰐と見做すのは、この(6)のグループである。古くは平安時代の「和名抄」に

麻果切韻云、鰐音萼・和邇似鱉有<sub>レ</sub>四足<sub>レ</sub>喙長三尺、甚利齒、虎及大鹿渡水、鰐擊之皆中斷、とあり、近世に入つては、久米邦武博士は「日本人北上説」に

南方故郷で親しくしてゐたこの爬蟲類を記憶してゐた。

といふ、高木敏雄氏はその「比較神話學」（大正一二年）において

鰐は元來、南洋地方或は熱帶地方の動物にして日本近海の魚族にあらず。獅子の生存せざる歐羅巴の動物説話に、此動物の現わるるは、その起源の印度なるを示すものとせば、同様の理由によりて、日本の説話に鰐の見ゆるは、其南方起源を證明するものには非ずや。

と述べ、更に高木氏は翌年その「日本神話傳説の研究」(大正一四年)にも

熱帶の鰐の見ゆるは、此説話の南方起源を暗々裡に示すものに非ざるか。

と書いている。堀岡文吉氏も「兎と鰐と出雲民族」(昭和二年、同氏「日本及汎太平洋民族の研究」所收)と題する論文に、前記のごとく

「兎と鰐」の神話を持った南方の種族が日本に漂着したと解釋し得られると云う可きであらう。

と述べ、西村眞次博士もその「神話學概論」(昭和二年)に

鰐果してクロコダイル或はアリゲータなりや、然りとせば輸入者はインドネシアと推定さる。

と述べられてゐる。特に重要なことは、昭和六年になつて、徳川義親氏は民俗學(第三卷第五號)誌上に「稻羽の素菟考」と題して、本説話の類話がマライ半島にあることを發表され、南方起源を明らかにされたことである。中田千畝氏も「黒潮につながる日本と南洋」という著書で、本説話が南方から黒潮の北上に伴つて渡來したと解すべきことを述べられた。

しかし何といつてもこの説話が南方起源であることを最も明細に強調されたのは、松本信廣教授の「和邇其他爬蟲類名義考」史學第二〇卷第三號(昭和一七年)であつた。松本教授は、第一に日本のワニという言葉が、南方諸民のいう鰐の

呼稱例へばマライ語の buaya (buwaya), ジャワの wu(h)aya その他 woea, wuae などと系統を一にすることを、多くの土語を集收整理して語源學的に論じられたこと。第一には、兎と鰐の本説話が、インドネシアの民話に類似するのみならず、出雲風土記における一匹の和邇の腹を割くと喰われた猪麻呂の女の一脛が出てくる話を初め、和邇が女神を戀ふる物語、その他豊玉姬傳説など多くの物語の類話がマライやジャワ方面にも擧げられること。第三には、兎が他の動物の背中を渡るといふ話に、背中が鋭角をなしたサメよりも、背の平たいワニのことと解した方が合理的であること。松本教授は、この第三のことに關しては特に強く主張されているのではないが、筆者は、説話の創作者の心理にまで深く突込んだ點で、そのプリオリテイーを高く評價されて良いと思う。ともかく、松本教授のこれらの論考は、「兎と鰐」説話を論ずる上に見逃し得ない研究であつた。そして同じ年の十月、松村武雄氏が「南洋の神話を思う」(サンデー毎日第二一年第四一號)なる一文に「兎と鰐」説話にも觸れ、

注意すべきは、わが國の神話との類同である。「猿蟹合戦」や「因幡の兎」等にそつくりそのままの物語が南洋に見出されることは、人のよく知るところであるが、かの「古事記」「日本書紀」に見ゆる有名な「海幸彦・山幸彦」の神話の如きも、それに類似の物語がインドネシアにちゃんと存している。日本民族と南洋民族との間にいくらかのつながりがあるか否かの問題に關しては、今日のところどちらとも自分は答へたくないが、兎に角南北アメリカやアフリカの神話が到底企及し得ないほどの類同を、南洋の神話が日本のそれ等に對して持つて居ることは、拒むべからざる事實である。

と述べ、更に松村博士は、この日本の神話が南北アメリカやアフリカのものよりも南洋諸島—大洋州のものに著しく類

似する理由について、

自分はこの差異を地理的環象の相違に歸したい。さらにまたマレー半島、スマトラ、ジャワ等を通してアジア大陸の文化が流れ込んだこと、およびリヴァーズが説示したやうに、西方からの移住民が廣くその文化を散布したことなども、南洋における神話の著しい類同の原因をなしてゐるであらう。

と書かれていた。

#### (四) 安南の「兔と鰐」説話

松本信廣教授や松村武雄氏の所説は丁度太平洋戦争も真最中で、日本の關心も自から南方に注がれていた頃である。當時私はこの南方に航空隊將校として召集されていたので、機會あるごとに、本説話に關する研究資料の集收を試みていた。

先づ第一に安南の昔話に類話を見つけた。その一つは、シヨロンの Pham-Van-Thinh が編集した「初代傳 CHUYỆN ĐỜI XƯA」Saigon 1929 で、これは安南の童話や傳説など五十七話を集録しており、その中の第三十番目の話に、兔が虎や鰐その他の動物をだます話があり、その最後に

Con Thỏ chạy đến một bên mé sông không biết làm sao mà qua sông cho đặng. Vừa gặp con Sấu ở dưới sông nổi lên, thì nó kêu con Sấu mà nói rằng: ((Bớ anh anh làm phước đưa tôi qua sông, rồi tôi sẽ gả chi tôi cho anh.)) Con Sấu tin làm lòng, mới đưa con Thỏ qua khỏi

sông, rồi con Thỏ lên trên bờ mà nói rằng:)) chi ở đâu mà gả cho mày? Mày là loài dữ tợn hay ăn người ta.)) Rồi ngày kia con Thỏ lại đến mé sông đó mà ăn cỏ, vừa gặp con Sấu đói về cỏ trên lưng mà lội; con Thỏ làm mới nhảy xuống mà ăn cỏ. Con Sấu rình tấp con Thỏ, rồi ngậm đó mà hừ hừ làm bộ giận lắm, thì con Thỏ lại nói gạt con Sấu rằng: ((Anh hà hà tôi mới sợ, chứ anh hừ hừ tôi không sợ đâu.)) Con Sấu vừa hả miệng ra hà hà, con Thỏ nhảy đi mất. Té ra một đời con Thỏ gạt các loài vật hoai mà khỏi chết.

と出ている。すなわち、安南では、川を渡ろうとした兎が、鱧に川を渡してくれば自分の姉さんを迎えるといつてだましている。そして一匹の鱧が背中に兎をのせて行き、澤山の鱧が一行にならばせられたのではない點が日本の場合と異なる。同じく安南の昔話を集めた Vallons, Renée; Seigneur Tigre & Cie (Contes d' Annam) saigon 1942 に載せられた「兎と鱧」(Le lièvre et le crocodile) は、前書より話が次のごとく詳細である。

Un jeune Lièvre habitait des coteaux verdoyants, qui venaient mourir en pente douce sur les bords d'une rivière. Sa famille vivait de l'autre côté de l'eau et pour aller honorer son père et sa mère, il se servait d'un pont naturel qui consistait en un arbre abattu d'une berge

或る一匹の年若い兎が、青々と茂った丘に住んでいました。その丘は河岸すれすれまでなだらかな傾斜をなしていました。その兎の家族はその河の向う側に住んでいたのです。お父さんやお母さんに孝行をしたに行く時には、向うの堤で切り倒されて河に横たわっている丸たんぼの橋を利用するのでした。



à l'autre.

Un soir, un typhon terrible se déchaîna et fit violence pendant trois jours. Le Lièvre se tapit au plus profond de son terrier et n'en sortit qu'une fois le beau temps revenu.

Il mit le nez dehors, et constatant que le pays avait été fort dévasté par l'ouragan, résolut d'aller prendre des nouvelles des siens.

Il trotta donc vers son pont habituel, mais s'arrêta fort perplexe au bord de l'eau. La rivière, grossie par le typhon, coulait à pleins bords et son cours impétueux avait, en effet, emporté l'arbre, dont il ne restait plus trace. Le Lièvre s'assit sur son petit derrière et se mit à se lamenter sur le sort qui semblait le séparer à tout jamais de sa famille.

或る晩怖しい台風が吹いて三日間荒れくるいました。兎は自分の巢の中にできるだけ深くうずくまつて、天氣の回復するまではそこを出ませんでした。

兎は外へ出てみると、そのあたりが嵐でひどく荒らされていることを知つて、家族たちがどうしているかを知るため、對岸へ行こうと決心しました。

そこで兎はいつもの橋の方へすたこら歩いて行きました。が、あまりの驚きに立ちすくんでしまいました。台風のため、水がふえた河は岸いっぱいに溢れて流れ、そしてその激流は果して丸たんぼの橋を持ち去り、今はあとかたもありませんでした。兎は小さなお尻をおろして坐りこみ、そして永久に家族から離れてしまう様に思はれる運命を悲しみました。

Un Crocodile, qui se vautrait dans la boue non loin de là s'enquit des causes de son chagrin, ce que le Lièvre lui conta aussitôt.

—As-tu une nombreuse famille? demanda le Crocodile avec sollicitude.

—Oui, mon père, ma mère, deux jeunes frères et une sœur.

—Une sœur? Est-elle jolie? fit l'autre très intéressé.

—Jolie! Tu veux dire que c'est une beauté... Tous les lièvres du Quang-Nam aspirent à sa patte et mon père n'en trouve aucun assez bien né ni assez riche pour elle...

—J'ai un fort beau repaire, dit le Crocodile anxieusement, et de très belles chasses, le long de ce fleuve. Quant à ma famille, c'est la plus

兎からそう遠くない泥の中にいた一匹の鰐が、兎の悲しむ理由を尋ねました。そこで兎はすぐさま鰐に悲しみの原因を語りました。

「きみの家族は澤山いるのですか?」と同情しながら鰐はたずねました。

「はい、父と母と弟が二人と、そして一人の妹がいるんです。」

鰐は非常な興味をもつて「一人の妹だつて?彼女はきれいかね?」

「きれいですとも!あなたは彼女が美人だといいたいのでしょう。クワンナムに住んでいる全ての兎が妹の脚にあこがれているのです。そして私の父より育ちがよく財産のある者は他にありません...。」

鰐は案じながら「私は堅固で美しい隠家や、この河に沿つてとても素晴らしい狩獵場を持っています。私の家族はこの當りでは一番古顔なんです。」

ancienne de la province. Crois tu que ton père m'accorderait la patte de ta sœur?

Le Lièvre fit mine de réfléchir profondément.

—Peut-être, dit-il d'un air de doute, mais il s'en remet toujours à mon jugement. Je pourrais évidemment dire un mot en ta faveur, mais par quel moyen me rendre chez moi, maintenant que l'arbre a été emporté?

—Qu'à cela ne tienne: monte sur mon dos et je te passerai de l'autre côté, sans mouiller un poil de ta fourrure. Promets-moi seulement de me faire donner ta petite sœur en mariage.

—Tope-là! s'écria le Lièvre. Tu es un beaufrère parfaitement à mon goût.

Et s'installant sur le dos de son nouvel ami, il passa la rivière sans dommages.

君のお父さんはその妹さんの立派な脚を私に下さると思いませんか?」

兎は深く考へる様子をしました。

「出来るかもしれませんが。父は思案があればいつも私のいう通りにします。貴方の御好意について私はとりなしてあげることができのですが、橋が流されてしまった今、どうして家に歸つたらいいでせうか?」

「そんなことはわけではない。まあ私の背中にお乗りよ。君の毛一本濡らさずに向う岸に渡してあげよう。だが一言約束しなさいよ。君の妹さんをお嫁にくれるつてことをね。」

「いいですとも」と兎は叫びました。「貴方は確に私の大好きな義兄弟ですよ。」

そこで兎は新しい友達の背中坐つて、安全に河を渡りました。

Arrivé à l'autre bord, il sauta à terre et se mit à se moquer du Crocodile, riant du bon tour qu'il lui avait joué.

向う岸に着くと、兎は岸に飛び上つて鱐をあざけり、鱐をだましたうまい計略を笑いました。

—Non, mais regardez-moi ça ! Il se figurait que j'allais lui donner ma sœur en mariage ! Elle est bien trop belle pour un sauvage de ton espèce, lourdaud, traînard !...

「駄目だよ、私をみてみな！あいつは私が妹を嫁にやると思つてやがらあ！彼女は、お前のように氣のきかないのろまで野蠻な者にやるには余りにも美し過ぎるんだよ！……」

Et d'une pirouette, il s'esquiva.

兎はくるりと尻を向けて逃げて行つてしまいました。

この後、この安南の話は草をかぶつて待ち伏せしている鱐の上で、この兎が草を食べて居眠りをし、河の中に連れ込まれて溺死してしまうことになっている。

### (五) カンボジアの「兎と鱐」

一九二七年、ミダン (P. Midan) というフランス人が、カンボジャ文とフランス文とでプノンペンから出版した HISTOIRES DU JUGE LIÈVRE (利巧な兎の話) の中に、「どうやつて兎は河を渡るために鱐の背に登つたか」という題で、次のような話が載っている。佛語譯から邦譯すれば次のごとくである。

兎が畏から逃げたその日に、兎は河を渡らうと思つた。しかし、たゞ一人では彼は河を渡れなかつた。そこで彼は

考へた。「私は詭計を使つて鰐を騙し、彼に河の對岸まで私を運ばさせてやらう。」

兎は河岸に行き水面から現れた鰐の頭を見て云つた。

「ネエ鰐君、こちら側の岸にはもう喰べる草が無いんだ。僕を哀れとおぼしめして河を渡らしてくれないか。僕は甘い水と泥がある場所を知つてゐる。素晴らしいよ。君は満足して奥さんも子供達のこととも忘れるだらう。」

鰐はその話し振りを聞きながら全く納得して答へた。

「もしも賢い君が、僕に同情し甘い水と泥のある場所に私を案内してくれようというなら僕はうれしいよ。僕は決して御恩を忘れないだらう。」

兎は云つた。「それでは出發しよう。」鰐は兎を河の對岸に運ぶために彼の背に登らした。

兎の鰐のざらざらした皮膚をみて嫌悪を感じた。そこでバナナの葉を採りに行き、坐る前にそれを鰐の背に置いた。

驚いた鰐は尋ねた。

「どうして君は僕の背にバナナの葉を置いたんだね。」兎は答へた。

「僕の尻が清潔でないからさ、君の背を汚すのはいやだからね。」

鰐は河を渡り兎を對岸に上陸させた。兎は固い地面に上ると云つた。

「薄のろサン。君は一體どこに甘い水と泥を發見しろというんだね。僕は君の汚ない背中が嫌いだつたから、尻の下にバナナの葉を敷いたのさ。」

かくして利功者は悠々と立去つた。